

## 高齢社会を視座においた大学の開放講座 (リカレント教育事業)の新たな可能性について

—ジェネレイショナル・サイクルの視点から—

小池 茂子  
(聖学院大学)

### はじめに

地方創生会議が提出した少子高齢社会における地方の限界集落消滅説<sup>(1)</sup>は、世に大きな衝撃を与えたが同時に反論も提出された。反論の内容は、あるべき地方創生の本質は「人材増」、つまるところ地域に住み続け且つ、本気で地域の再生に乗り出す「ローカル人材」の育成である<sup>(2)</sup>という趣旨で貫かれた。また、世界の中でも経験されたことのない超高齢社会の到来を踏まえ、高齢者に対する認識を転換させ彼らの能力やエネルギーを生産的な活動に生かすべく、高齢社会を支える主体として高齢者の社会参加を促すべきであるとの主張が『平成26年版高齢社会白書』<sup>(3)</sup>や教育再生実行会議提言「『学び続ける』社会、全員参加型社会、地方創生を実現する教育の在り方について」<sup>(4)</sup>に展開されている。

これらの議論には高齢期をいかなる時期として生きるのかという人間存在のありかたについての問いが示されおり、共同体の一員として社会を形成している人間同士が、どのように互いを理解し、生活を営み生活の安定を築いていくのかという社会的な統合に関する課題をも投げかけている。

高齢者が存在することと老人問題は常に同時発生的に存在するものではないとの指摘がある。「『老人問題』は、『老人の存在』をある時代ある社会が、その従来の仕組みでは、その維持・存続にとって障害になると感じた時に生じるものである」<sup>(5)</sup>といわれるように、高齢者の存在がそのまま社会問題に直結するものではなく、それは高齢者をとりまく社会の仕組みや人々の価値観によって大きく左右されるものといえる。21世紀のわが国の超高齢社会を支えていくには社会保障や医療・福祉といった社会保障の充実はいうまでもないが、高齢者を弱者や引退者とのみ見なす従来の社会通念を見直し、各人が社会のなかで一個の人間として生涯にわたって自分らしい生きかたを全うできる社会の実現も重要課題の一つといえる。

老年学は、社会が高齢化するにもなって社会の高齢化をめぐる議論として社会の高齢化を楽観的にとらえる意見と悲観的にとらえる二つの対立する見解がある事を示した<sup>(6)</sup>。一つは社会の高齢化に対する楽観論であり、「老い」に対する社会的偏見を解除し、高齢者のもっている生活経験の中から得た知恵の評価を認め、社会的な公正の価値体系のなかで民主的に「老い」をとらえようとする立場である。他方、悲観論は、老年世代の増加と老年期の長期化による社会的圧力は、生産力を低下させ、保守的体制が強まり、世代間の社会的地位の交代を遅らせることにつながり、結果、若い世代には経済的負担と心理的な葛藤に耐えがたい社会が到来するとする見解である。周知のようにわが国では社会の高齢化を楽観的にとらえようとする思潮は希薄であり、高齢者や高齢社会に対する悲観論が社会を席捲しているといっても過言ではない。

したがって社会の高齢化をめぐる悲観論に修正を促すためにも、高齢者自らが社会参加を果たし、異なる世代と共に高齢社会を新たに創り出すための行動を起こすべく、高齢者の社会参加を促そうとする論調が近年の政策からは見てとれる。筆者は、高齢社会を考える際に、活動理論だけで高齢期の生活を括ることは不可能であるということを知っている。しかし、高齢期を「引退、喪失期」と否定的に捉えてきた従来の価値観に修正を促す意味でも、高齢期の人間の中に形成されている知恵や経験を社会に生かすことで、「老い」や高齢期に肯定的な意味合いを見出す努力を社会全体で行うことは21世紀の日本社会において必要不可欠なことがらであると考えられる。

本稿は、高齡者の社会参加という観点から大学の開放講座の一環として開講されている大学の正規科目において、開放講座の受講生として参加している高齡者と正規学生とが社会の高齡化や高齡期に関する講義を共に受講することを通じて、高齡者が若い正規学生にもたらす影響についての分析を試みるものである。またこの研究は、エリクソン、E. H. (Erikson, E. H.) が提出したライフサイクル論が「個体の発達」だけ見ていたのではなく、「世代と世代の関係（育て一育てられる関係）」にも広がりを持つと論じた「ジェネレイショナル・サイクル (generational cycle)」<sup>(7)</sup> の検証にもつながるものとする。エリクソンはジェネレイショナル・サイクルについて、人が現在位置する発達段階の心理社会的危機を解決しながら生きる姿は、同時にライフサイクルにおける次世代を育てるという形で影響を及ぼすと説明している。また、ジェネレイショナル・サイクルを個人の成長の視点にとどめるだけでなく共同体（家族、サークル、村落、国家…）に移せば、それは共同体の新陳代謝を促すという考え方にも視座を広げることにもつながるといえる。共同体に新しいメンバーが加わることによって、共同体はリニューアルし、任務を終えたメンバーを看取る（感謝し敬意を表す）ことによって共同体はリニューアルするというのである<sup>(8)</sup>。高齡期を生きる者が、自らの高齡期をどのような時期として描きその時を生きているのか。また、高齡期を生きる者たちの姿から次に続く世代が高齡期をどのような時期と受け止め、自らの生きざまに反映させていくのか。先行世代から後続世代への生の取り組みの連環が、共同体（社会）の中に新たな新陳代謝をもたらしていくというのである。

このような関心に基づき、本稿では埼玉県に所在する聖学院大学の「大学の開放授業講座（リカレント教育事業）」の一環として提供されている「現代社会と社会教育—高齡化と社会教育—」において、20歳代の学生と、60歳代・70歳代の社会人とが講義を共に受講する中で、高齡になるということ、人生について、高齡期の特徴、高齡期の学習者に高まる学習ニーズなどについて同じ教場で学び、時に講義で扱うテーマについて意見を交わし合う中で、高齡期を生きる受講生の存在が現役の学生の思考にどのような影響を及ぼしているのかについて分析を試みた。

これまで、大学開放講座に関する研究では、社会人が大学の提供する多彩

な講義を正規学生とは異なる講座（教場）で受講し、その学習成果を社会に向かって還元する活動が紹介されてきた。また、大学公開講座における正規学生と社会人の共学についての分析には佐久間章の研究<sup>9)</sup>があり、大学が提供する開放講座での学習成果を正規学生への学びのアドバイザーという形で生かすことに関する研究には大橋真らの徳島大学大学開放実践センターの事例<sup>10)</sup>が知られている。しかし、それらの考察は受講生と学生の共学がどのような感化を双方にもたらしたかをアンケート調査等を通じ分析したものであり、異なる世代が同じ講義に参加し、互いが抱いた異なる見解を講義の中で交換する中で、それが双方の認識や生き方に具体的にどのようなインパクトを与えたかを質的に分析するまでには至っていない。

そこで本稿では、20歳代の正規学生が高齢期を生きているリカレント生と同じ講義を通じて高齢に関する諸テーマについて学び時に意見を交わし合うことで、高齢期を生きる受講生の言葉や考え方が、次の時代を担っていく学生たちの「高齢期をめぐる認識」にいかなる影響を与えたかを「世代と世代の関係（育て一育てられる関係）」をも視野において質的に分析し考察を試みることにした。

この考察に先立って、まず高齢者の学びや社会参加の奨励が日本社会の中でどのような形で促されてきたのかを1960年代以降の社会福祉行政、文教行政の観点から俯瞰し、その施策から浮き彫りにされた高齢者像について概観することとする。

## 1. 1960年代以降のわが国の社会福祉行政、文教行政にみる高齢者像

戦後、新民法下での家長制度の廃止や、老親の扶養義務に関する規定の変化、さらに高度経済成長下での急激な社会生活の都市化に伴う老人問題の顕在化によって、高齢者を対象とする新たな施策が展開された。まず、1960年代初頭には老人福祉事業の一環として老人クラブが全国的に組織された。老人クラブは同年代の高齢者が地縁的仲間集団をつくり、孤立せずに老後の余暇生活を営むといった老年世代の学習的要素を一部に包含した余暇集団的、地域集団として機能した。また1963(昭和38)年には老人福祉法が制定

されたが、同法の総則には、「2. 基本的理念」として「老人は、多年にわたり社会の進展に寄与してきた者として敬愛され、かつ、健全で安らかな生活を保障されるものとする。」とあるが、この条文における老人像は、過去における社会の功労者として、今後は社会保障サービスの受給者としての位置が与えられていると批判された。

一方、高齡化社会を目前にして1960年代の文教政策では、高齡者を対象とする公的社会教育の本格的な取り組みとして「高齡者教室」が実施に移された。1965(昭和40)年、国は高齡者教育の振興のために市町村に対して60歳以上の成人を対象とする「高齡者学級」の委嘱を始めた<sup>(11)</sup>。その後、高齡者学級の機運は次第に高まり順調に発展した。1971(昭和46)年には社会教育審議会答申「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方」が提出され、同答申では今後高齡者教育で取り上げられるべき課題として、1) 再就職に備えての職業的な訓練に関する事、2) 健康管理や保健衛生に関する事、3) 余暇を有意義に過ごすための趣味や教育に関する事、4) 社会の変化を理解するための時事問題に関する事、5) 若い世代の理解に関する事、6) 話し相手やレクリエーションのための仲間づくりに関する事、7) 孫の教育や地域社会の子ども会などの指導に関する事、8) その他、各種の社会奉仕活動に関する事の8項目があげられた。さらに「…今後の高齡者教育は、高齡者自身が、老年期にふさわしい社会的な能力を養い、できるだけ長く自立的な生活を続け、世代の隔絶の幅をせばめ、生きがいのある生涯を全うすることを主眼として行われるべきである」<sup>(12)</sup>として、同答申が示した学習活動の目的・方法・内容、高齡者像についての着眼点がその後の高齡者教育の指針となった。これを受け1973(昭和48)年には従来の「高齡者学級」にかえて「高齡者教室」が開始されこれを開設する市町村に対して国庫補助の道が開かれた。これが契機となり高齡者教室の数は昭和50年代にかけて飛躍的に伸びていったのである。当時は高齡化社会になったわが国が従来の経済中心のあり方を転換して福祉国家建設に向けて大きく歩み出した時期であり、高齡者を対象とする社会教育の取り組みも、生涯学習の理念の啓発と、教育文化活動を通して高齡者の余暇を充実させ、無為に日々を過ごさない高齡者の「生きがいづくり」が施策の中心的な取り組みであった。

表1 高齢者をめぐる教育・社会福祉関連施策の動向

文教施策	老人福祉施策
	1951年「老人クラブ」結成 (60歳以上であればだれでも参加できる全国規模の高齢者団体で、1951年に中央社会福祉審議会(現、社会福祉協議会)の働きかけによって誕生) 1) 娯楽, 2) 教養・学習, 3) 健康管理, 4) 社会参加
1965年 ユネスコ第3回総会「生涯教育」の理念提出される 1965年 高齢者教育振興のために市町村に対して60歳以上の成人を対象とする「高齢者学級」委嘱開始	1963年「老人福祉法」制定 それまでの老人福祉の内容は経済的な保護であり、貧困対策が主であった。それが、一般の高齢者へと拡大される。 *消極的の老人福祉行政から、積極的・前向きな「生きがいづくり」へ政策転換
1970(昭和45)年 日本の高齢化率7%となり、国連の指標による高齢化社会に入る	
1971年 社会教育審議会答申「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のありかたについて」	
1973年 文部省集団学習奨励事業の一環として「高齢者教室」助成開始 ①社会変化の理解, ②若い世代の理解, ③健康の維持, ④趣味・教養の充実, ⑤社会奉仕活動への参加, ⑥その他、年齢にふさわしい社会的能力の向上が学習内容として示された	
1973年 内閣総理大臣官房に老人対策室設置 わが国における、人口の急激な高齢化に対応するための施策に関して、関係各機関相互の緊密な連絡を確保し、総合的な施策推進を図ることを目指した	
1978年 高齢者人材活用事業新設 「高齢期」を充実させるための学習活動を奨励推進するの必要を強く打ち出す	
1982年 国連・高齢者問題世界会議 「高齢者問題国際行動計画」の中で、今日の高齢者問題は保護やケアの提供にとどまらず、高齢者の社会への関与と参加の問題であることが指摘された	
1984年 「高齢者の生きがい促進総合事業」開始 「市町村が高齢者の生きがいを総合的に高めるために、福祉関係部局や老人クラブなど関係団体との連携を図り、高齢者の生きがい対策を効果的に行う」ことを目的とした	
1984～1987年 臨時教育審議会第1次～第4次答申	
1984年 「高齢者教室」と「高齢者人材活用事業」が統合され、「高齢者の生きがい促進総合事業」発足 全国高齢者社会参加フォーラムなどを通じ、社会参加が奨励される	
	1985年 高齢者対策企画推進本部による施策 ①高齢者自身の自立, ②高齢者の活力の重視 ③地域・住宅サービスの重視, ④高齢者によるサービス費用の応分の負担による公平と公正の確保, ⑤シルバー・サービスの健全育成等民間活力の導入を図る *政策は自立・自助をもとめる方向性を強めていく
	1988年 「福祉ビジョン」[「長寿・福祉社会を実施するための施策の基本的な考え方と目標について」]
	1988年 全国福祉祭(ねんりんピック)開催
	1989年 「高齢者保健福祉推進10カ年戦略(ゴールドプラン)策定
	1989年 「長寿社会開発センター」設置(国) 「明るい長寿社会推進機構」設置(都道府県) 「高齢者の生きがいと健康づくり推進モデル事業」開始(市町村)

表1 つづき

文教施策	老人福祉施策
1990年 生涯学習振興法制定	1990年 老人福祉法一部改正 第2条「老人は多年にわたり社会の進展に寄与してきたものとして、かつ、豊富な知識と経験を有する者として敬愛されるとともに、生きがいをもてる健全で安らかな生活を保障されるものとする」 第3条「老人は、老齢に伴って生ずる心身の変化を自覚して、常に心身の健康を保持し、又は、その知識と経験を活用して、社会的活動に参加するように努めるものとする」 第3章2「老人は、その希望と能力に応じ、適当な仕事に従事する機会その他社会的活動に参加する機会を与えられるものとする」
1992年 生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」の中で、重点課題として1) 社会人を対象としたリカレント教育の充実、2) ボランティア活動の支援・推進、3) 青少年の学校外活動の充実、4) 現代的課題に関する学習機会の充実、が上げられた。	1993年 老人大学学校（シニアリーダーク養成目的）41県で実施 （*「明るい長寿社会推進機構」が国と市町村のパイプ役となり都道府県レベルで高齢者大学/老人大学（校）を開設・運営）
1994年 日本の高齢化率14%となり、	国連の指標による「高齢社会」に入る
1990年代、本格的な高齢社会の到来に向けて、活力ある豊かな社会形成を目指し、高齢者の学習機会体系整備と学習活動を通じた社会参加活動を総合的に促進するための条件整備が進められた 1994年 「高齢者社会参加促進総合事業」開始 新しい高齢者の役割について考える機会として、「全国高齢者社会参加フォーラム」を毎年開催 1996年 「高齢者社会参加活動支援事業」 高齢者グループが独自に企画・開発して実施する上でのモデルとなる、社会参加活動への支援や高齢者を対象とした指導者養成講座の開設等を行う都道府県への助成開始 1997年 「高齢者の学習・社会参加活動推進事業」 事業の一環として、学習活動を通じて修得した知識・技術の支援や世代間交流、高齢者に対する学習機会の提供等を行う市町村に対し助成開始 3. 高齢者の社会参加促進に関する特別調査研究 (この間、長寿学園開設される)	1994年「新・高齢者保健福祉推進10カ年戦略（新・ゴールドプラン）」策定
1995年「高齢社会対策基本法」（議員立法）制定、1996年「高齢社会対策大綱」提出	
	2000年「今後5カ年の高齢者保健福祉施策の動向（ゴールドプラン21）」策定 2000年4月「介護保険法」開始
2001年 高齢社会対策の推進の基本的あり方に関する有識者会議報告書「高齢者対策の推進の基本的あり方について—一年齢から自由な社会を目指して—」の中で、新たな高齢者像が提出される	
2011年 文科省内に「超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会」設置	
2012年 超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会「長寿社会における生涯学習の在り方について」提出	

しかし、1980年代に入ると1982(昭和57)年の国連・高齢者問題世界会議<sup>(13)</sup>において採択された「高齢者問題国際行動計画」にあるように、今日の高齢者問題は保護やケアの提供にとどまらず、高齢者の社会への関与と参加の問題であることが指摘された。このような流れを受けて、わが国でも高齢者の余暇を充実させる目的から行われた趣味や娯楽、教養中心の学習機会の

提供事業に加えて、より高度な知識や技能の獲得をめざした学習や積極的な社会参加活動を奨励する動きが顕著になっていった。1981(昭和56)年には高齢者の社会参加活動の機会を提供する「高齢者人材活用事業」が展開され、さらに1984(昭和59)年には「高齢者教室」と「高齢者人材活用事業」が統合され、新たな事業を加えて「高齢者の生きがい促進総合事業」が発足した。

その後、高齢者社会参加促進総合事業として全国高齢社会参加フォーラムの開催など高齢者の社会参加が奨励されていく。1992(平成4)年の生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」のなかで、当面重点をおいて取り組むべき課題として、1) リカレント教育の推進、2) ボランティア活動の支援・推進、3) 青少年の学校外活動の充実、4) 現代的課題に関する学習機会の充実が取り上げられたことを受けて、学習ボランティアとして人々の学習を支援する指導者の養成を目的とした「長寿学園」や、1999(平成11)年からはサラリーマンOB等を対象にボランティア活動などの社会参加に関する情報提供や相談に応じる「高齢者のボランティア活動相談事業」が開始された。現在もボランティア養成講座は盛んに開催され、同時にそこでの学習成果の活用が課題となっている。また生涯学習という言葉が社会に浸透する中で、趣味や娯楽、教養といった楽しい学習にとどまらない、高等教育レベルの教育機会も次第に社会に開かれていった。通信教育や放送大学、大学公開講座、大学の科目等履修生制度、高等教育への社会人入学制度等、今日では高度で多様な教育機会が世に開かれている。文部科学省の調査報告によると、2010(平成22)年、大学における社会人入学者は、公開講座や短期の教育課程も含めると全国で140万人であるという<sup>(14)</sup>。これらの機会を利用して、より高度で専門的な内容の学習に取り組む高齢者の姿が近年では見うけられるようになっている。

社会福祉政策においても1980年代後半には、本格的な高齢社会を迎え大きな制度改革が実施に移された。1989(平成元年)年に「高齢者保健福祉推進10カ年戦略(通称ゴールドプラン)」が策定され、1990(平成2)年6月には、21世紀の高齢社会の到来にあたり高齢者の保健・福祉の推進の観点から「老人福祉法等の一部を改正する法律」が成立、「老人福祉法」をはじめ福祉関係8法の改正が行われた。改正された老人福祉法の総則「2. 基本的理念」

は「老人は多年にわたり社会の進展に寄与してきたものとして、かつ、豊富な知識と経験を有する者として敬愛されると共に、生きがいをもてる健全で安らかな生活を保障されるものとする」(\*下線は筆者加筆)とされ、高齢者を「豊富な知識と経験を有する者」として高齢を生きる人間の能力について肯定的な解釈が加えられた。

これらの法律改正は「平成の福祉改革」とも呼ばれ、以降、老人の健康・福祉サービスの提供は、老人に身近な市町村を核として展開されることになった。2000(平成12)年には新たに「今後5カ年の高齢者保健福祉施策の方向～ゴールドプラン21～」が策定されたが<sup>(15)</sup>、「ゴールドプラン」や「平成の福祉改革」には、従来のような老人を単に弱者として、あるいは受益者として福祉の対象としていたネガティブな視点ではなく、老人自身及び社会の側の努力により老人自身の積極的社会参加を期待するというポジティブな視点が認められる。また、超高齢社会を目前に控え、今後は福祉を単なる保護的な施策としてのみ用いるのではなく、高齢者の能力を生かし積極的人生を送るための施策と捉えられると指摘された<sup>(16)</sup>。秋山智は、「これからの高齢者は、単に福祉や医療に甘んじるだけでなく、より積極的な生き方をするために、自らの努力(学習)と適切な周囲の援助(教育)によって、医療や福祉などの制度をうまく活用して、なおかつ自立していくという精神が不可欠であろう。さらに、老人福祉に携わる人の側にもその視点は必要である。」と論じている<sup>(17)</sup>。

2001(平成13)年9月に提出された『高齢社会対策の推進の基本的あり方に関する有識者会議報告書』では「これからの高齢者」として新しい高齢者像が提出された。報告書では1947(昭和22)年から1949(昭和24)年に生まれたいわゆる「団塊の世代」を「新しい高齢者像」として想定し、次のように記している。即ち「団塊の世代は、これまでの高齢者とは異なり、戦後教育を受け、高学歴の者も多い。…さらに生涯学習への関心の高さ、パソコンなど通信の高度化への適応力、レジャー・余暇嗜好の強さもうかがわれる。このような新たな意識、行動様式を持ち、大量に高齢期を迎える団塊の世代が、就業に限らず、さまざまな仕方のできるだけ社会への貢献を続けられるよう、適切に支援していくことが求められよう。」<sup>(18)</sup>とある。また、支援に係る政策について総合的に研究又は評価するに当たっての視点として、ア. 元

気高齢者，イ．一人暮らし高齢者（女性後期高齢者），ウ．要介護等の高齢者，と高齢者を類型化し類型ごとに適切な施策を講ずることの必要性が論じられた。また，同報告書では「高齢者の画一的なイメージ（老人神話）からの脱却」を掲げた。高齢者を年齢だけで別扱いする制度，慣行等の背景には，高齢者の多様性を無視し，高齢者を否定的な捉え方で一括りにしてしまうような先入観があるのではないかと指摘し，さらに，若い世代ほどネガティブな高齢者のイメージにとらわれているとして，こうした高齢者の画一的なイメージから脱却して，客観的・科学的な根拠をもって対策を進めていくにも，加齢又は高齢社会に係る事象や政策について学際的，包括的に研究するジェロントロジーを一層推進することが重要であると論じた。

このように国の施策を概観しても，高齢者の学習もサービスの受給者という立場にとどまらず，学習が新たな能動的な活動へ高齢者を結びつける時代が訪れたといえる。そして，高齢者を否定的な捉え方で一括りに捉えないためにも，高齢者と若者世代の異世代が互いに理解をするための教育が意味を持つものとされ今日に至っているといえる。

## 2. 聖学院大学における「大学の開放授業講座（リカレント教育事業）」を通じた正規学生と高齢者受講生との学びを通じたジェネレイショナル・サイクル（generational cycle）形成の可能性について

聖学院大学（在，埼玉県）における大学の開放授業講座（リカレント教育事業）において高齢の受講者と20歳代の正規学生が大学の正規科目において共に学ぶという教育的試みについての論考に際し，まず現在埼玉県下で行われている「大学の開放授業講座（リカレント教育事業）」について若干の説明を加える。これは埼玉県福祉部高齢者福祉課と埼玉県下に所在する大学との協定の取り交わしによって2006(平成18)年から開始された事業である。2015(平成27)年度の4月現在，埼玉県下の16大学が参加し206科目が提供され489人の社会人が受講している。

筆者も聖学院大学の提供するリカレント教育事業の一環として2007(平成19)年より「現代社会と社会教育」の科目を開放授業として提供している。

「子どもの学習を支援する教育原理に対して、1970年代から提唱され始めてきた成人教育学なかんずく高齡者の教育学（gerogogy）理論について論じることとする。尚、本講義で扱う高齡者の範囲は、病的及び加齢によって著しい知的な退行現象を呈している高齡者を除く高齡者とする。」として募集要項にこれを掲載した。また、講義内容は「1. 日本社会の高齡化の状況と将来推計 2. 戦前の高齡者の社会的地位（家長制度、尊属優位の民法規定） 3. 1960年代以降のわが国の高齡者を対象とする政策の変遷 4. 高齡期の幸せな生活をめぐる主張（活動理論と離脱理論等） 5. 生涯発達理論について 6. 加齢と知的能力 7. 成人教育学（andragogy）理論 —子どもの学習支援とどこが違うのか— 8. 成人後期の発達と危機（高齡期の発達課題・生活課題） 9. 高齡者の特性を活かした教育学（gerogogy）の理論 10. 高齡者の特性を活かした、有効な学習方法 11. 高齡者の学習関心・学習要求 (1). (2) 13. 具体的な教育実践の紹介 14. 活躍する高齡者紹介 15. まとめ」とし、2015(平成27)年度春学期は社会人が6名、正規学生47名が履修登録を行い、うち、社会人4名、正規学生24名が恒常的に出席した。

つぎに本講義を通じた正規学生と高齡者受講生とのジェネレイショナル・サイクル（generational cycle）について考察するに当たり、この概念について明らかにしておきたい。ジェネレイショナル・サイクルとは、エリクソンの唱えたライフサイクル論に含まれる概念である。エリクソンは「世代と世代の関係、〈育て—育てられる関係〉の連鎖」<sup>(19)</sup>を「ジェネレイショナル・サイクル（generational cycle）」とした。人間は自分のおかれた現在を生きながら、同時にそこには自分の先行世代との関係、そして自分の後に続く世代との関係性によって個人の発達が形づくられていくというのである。このサイクルは基本的には家族を単位とする血縁関係における世代と世代の連鎖が基本モデルであるとしても、視点を共同体に移せば、ジェネレイショナル・サイクルとは共同体の新陳代謝でもあるというのである<sup>(20)</sup>。

筆者は、この大学授業公開講座を通じて、高齡者と20歳代の正規学生が同じ教場で、高齡社会をめぐる社会問題や、高齡期の特徴、高齡期の発達課題、高齡者を対象とする学習援助の理論について学び、時にグループワークを通じて意見交換することを通じて、正規学生たち世代の若者が陥りがちな

高齢者の多様性を無視し高齢者を否定的な捉え方で一括りにしてしまうような、先入観やイメージに変化を促すことを一つの狙いとして講義を行った。また、今回筆者は、高齢期を生きる先行世代が、「高齢期」という自分の今を生きるために必要な課題解決に取り組みながら、同時に20歳代の後続世代となる学生たちに高齢期や老いをネガティブなものとして固定化させないという視点を育てることができるのか、即ち、大学授業公開講座を通じて「世代と世代の関係〈育て一育てられる関係の連鎖〉・ジェネレイショナル・サイクル」を作り出せるのかという問いを明らかにするためにつぎのような試行を行った。

今期の大学の授業公開講座は実質的に、60歳代2名、70歳代2名、合計4名のリカレント生と、20歳代の正規学生26名が受講した。そこで、今回の講義の中盤と終盤で、一つのアニメーション作品を見てもらい（著作権に配慮し部分的に上映）、それについてのコメントを求めた。上映したアニメーションは「つみきのいえ」<sup>(21)</sup>である。ひたひたと水面が上昇をつづけ、生活の場を浸水させていく街に一人きりで暮らす老人。迫りくる水を避けるように、老人は今まで住んでいた部屋の上につみきを積み上げるように新しい小さな部屋を築いていく。水面下には自分の過去の生活の場（部屋）が沈んでいる。水面下の部屋を訪ね、自分の幼少期から現在までの記憶を訪ねる老人の姿。小さな居室に戻ってきた老人は亡き妻の遺影を前にして、ワイングラスにワインを注ぎ乾杯をする。まさにエリクソン、E. H.の円熟期（高齢期）の心理社会的危機「統合vs.絶望」というテーマ設定が感じ取られる作品である。

1回目は、エリクソンの心理社会的危機について一切説明を行っていない時期にアニメーションを視聴してもらい受講生に自由記述の形でコメントを求めた。2回目は、全15回の授業中、第14回目に同じアニメーションをみせて自由記述の形でコメントを求めた。2回目の視聴の時には、受講生たちは講義の中で高齢期（円熟期）の心理社会的危機について既に学んでいた。

今回、受講生から提出された自由記述のコメントについて、テキスト分析ソフト（khコーダー）を用いて内容分析を行った。1回目はリカレント生の回答数3、現役生の回答数22、2回目はリカレント生回答数4、現役生回答数26であった。

表2は、リカレント生と正規学生のコメントの中から、双方に特徴的な「名詞」を抽出したものであるが、これらを比較してみると、現在自身が高齢期を生活しているリカレント生のコメントには、「老人」「人生」「自分」「歳」というように、自分自身の生き方とアニメーションを重ねたような単語があげられている。一方、正規学生のコメントには、アニメーションに描かれた風景・情景から読み取れる名詞が並べられているだけで、自分あるいは自分の人生との関係性からこのアニメーションをとらえた名詞は見当たらない。

また、表3についてみると、リカレント生のコメント中に「孤独」という言葉は出てきているが、「新しい」「静か」「自由」「ぜいたく」「幸せ」など、アニメーションに描かれた一人暮らしの老人の姿を否定的に捉えた修飾語はほとんど見当たらない。しかし、現役の学生のコメントを特徴づける言葉としては、「大切」「楽しい」という言葉があげられてはいるものの「悲しい」「切ない」「寂しい」というように、リカレント生のコメントの中には出てこなかった描かれた老人の姿を悲観的に感じ取っている修飾語があげられている。

このように同じ映像を視聴しても、高齢期という今を生活しているリカレン

表2 初回 リカレント生・現役生のコメントを特徴づける名詞

リカレント生		現役生	
老人	.270	水	.100
自分	.150	作品	.087
人生	.130	海	.048
歳	.129	パイプ	.048
姑	.129	人	.048
家	.103	シーン	.040
街	.094	上昇	.040
積み木	.091	映像	.035
アニメ	.083	世界	.035
思い出	.077	回想	.035

数値は Jaccard の類似性測度

表3 初回 リカレント生・現役学生のコメントを特徴づける形容詞・形容動詞

リカレント生		現役生	
新しい	.059	大切	.040
静か	.032	悲しい	.040
自由	.032	楽しい	.035
ぜいたく	.032	切ない	.018
幸せ	.031	寂しい	.018
重要	.030	深い	.018
孤独	.026	不思議	.013
		大きい	.013
		大事	.013
		さまざま	.013

数値は Jaccard の類似性測度

表4 リカレント生 初回コメント

1	<p>水没しつつある町で、積み木のように建て増しをした家に1人で暮らす老人。水は常に増え続け、定期的にレンガを積み上げて新しい家を作らなくてはならない。ある時、老人は落としたパイプを探すために、階下に潜ってそれぞれの家ごとに、亡くなった妻や嫁いだ娘などのぎっしり詰まった家族との思いでを回想する。積み木の家の一つ一つに、老人が生きて来た思い出がある。人生も積み木のように積み重ねていくもの。思い出の詰まった家だから、周りの人がいなくなっても、この街をはなれようとはしない。一人暮らしを続ける老人は、孤独ではあるけれども、思い出と共に静かに余生を過ごすというのは、幸せでぜいたくな時間でもある。現代の日本社会でも見られる、地方の街が連想されます。昔は活気づいていた街も、子どもたちが出て行き…、それでも年寄りも昔から居るこの街がいいと。しかし、思い出ばかりに浸っているのではない。老人の家に、また床上までに水が上がってきた。こうした今（現在）に対応するため、老人は、一人で、また新しい家造りを始める。（果たしていつまで、こんな暮らしが続けられるか？）直近の国政調査によると、日本全国の単身世帯（おひとりさま）数は、1679万世帯に上り、総人口の13%、全世帯数の32%を占めている。</p>
2	<p>この作品が2009年に受賞した時、私は59歳でした。受賞のニュースを見た記憶をおぼろげに思い出しました。作品を見たのは今回初めてです。ここに出てくる老人が、何歳くらいかは分かりませんが、今、私は65歳になり、誕生日数日前に区役所より、シルバーカードと介護保険証が届きました。「えっ！91歳の姑と同じ物が来た」とショックを受けながらも、「自分が世の中では高齢者なんだ」と自覚させられました。このアニメを見ながら、老人と同じく自分の人生を回顧しました。自分が36歳のとき、事故で主人が亡くなり、小1の長男、年長の次男、2歳の三男そして姑と5人暮らしで人生を歩んで参りました。現在、3人の息子たちも結婚、孫6人、そしてこの4月に姑が老人保健施設に入所しました。私は一人暮らしになりました。姑の入所の話が進む頃より、「自由な時間ができたら今までと180度違う時間を過ごしたい」という思いが有りましたので、今回のリカレント講座を申し込みました。この科目はパートの都合に合わせて選びましたが、授業の内容が自分にピッタリの内容である事がとても勉強になっております。このアニメの老人が進んできた、人生を回顧しながらこれからの人生の為に自力で歩む姿は、自分のこれからの人生と重なるように思われます。</p>
3	<p>老齢となった主人公が、あるきっかけからタイムスリップして、自分の過去の人生を振り返り、数々の喜びや悲しみ等を改めて思い出し、安堵感を持たれたが、残された人生に対して、生きることの価値を再確認し、そのための努力の重要性を暗示している。人生の意義を認識させるアニメである。</p>

表5 2回目 リカレント生・現役生のコメントを特徴づける名詞

リカレント生	現役生
自分 .111	思い出 .188
人生 .100	家族 .064
年月 .091	老人 .063
現実 .087	最後 .050
高齢 .080	主人公 .050
パイプ .065	場所 .050
生き方 .046	積み木 .043
肉親 .046	シーン .028
キーワード .046	レンガ .021
事件 .046	独り .021

数値は Jaccard の類似性測度

表6 2回目 リカレント生・現役生のコメントを特徴づける形容詞・形容動詞

リカレント生	現役生
新しい .087	寂しい .043
大切 .074	大事 .036
穏やか .046	楽しい .036
不思議 .046	孤独 .028
好き .044	深い .021
多い .044	悲しい .021
いろいろ .044	古い .021
自然 .044	少ない .021
厳しい .044	狭い .021
幸せ .040	軽い .014

数値は Jaccard の類似性測度

ト生が、一人で生きていようとそこに寂しさとか悲しさというものを介在させないコメントを提出しているのに対して、高齢期に関して生活実感を伴わないイメージとしてしか捉えていない正規学生は、一人で迫りくる水に住む部屋を浸食されながら新たな部屋をつくらなければならない老人の姿を単に、悲しく寂しい暮らしというイメージで括っていることが見て取れたといえる。

また、1回目と2回目の視聴との間には、講義においてエリクソンの心理社会的危機について解説を加えるとともに、リカレント生が提出したアニメーションに対するコメントを現役の学生の前で読み上げてもらうことを行った。コメントの内容は表4の通りである。

表5表6は、2回目のアニメーションの部分視聴を経たのちのコメントを分析した結果である。これを見ると、2回目においてもリカレント生は、名詞・形容詞・形容動詞について、ほとんど変化は見られない。また、現役生のコメントを特徴づける「形容詞」「形容動詞」も1回目と2回目において「大切」「楽しい」「悲しい」「切ない」「寂しい」というように、ほとんど変化は認められない。しかし、現役生の「名詞」に着目すると、初回のコメン

表7 講義最終日に無記名で提出された現役学生の講義に関するコメント  
(23ケース)

1	何十年も人生において先輩の方々と一緒に授業を受け、今の私にはまだ持ち合わせていない知識や経験などを含め、さまざまな新しい考え方を知ることができました。特に、印象的だったのは、よい老後を送るには何が必要かをテーマにした時、私には「老後なんてまだまだ先で、他人事のように感じていたが、リカレントの方々の声を生で聞いて、リアルに感じて参考になるところがたくさんあった。
2	今回、この授業を受けることができてよかったと感じています。とくに、リカレント受講生の方と、考え方が違うことが驚きで、同じ映像を見ても感想には私が思いつかないような、深いこれからの人生を見すえての考えがあり、すごいと思いました。年を重ねていくことで私もそのように考えられるだろうかと考えました。
3	リカレントの皆さんとの意見や、グループワークでの人の話を聞いて面白かった。また、授業のほうも、高齢者にとっての教育は何かで参考になりました。
4	面白い授業でした。なぜなら新鮮だったからです。この授業は、他の授業と違い、自分の人生と結びつきがあります。ためになる授業で、いろいろ考えさせられました。
5	高齢者に関する勉強が非常にためになりました。自分が高齢になった時、どのように生きていくか、早めに考える必要があると思いました。
6	リカレントの方々と、直接話し合っって講義をすることでとてもいい内容だと感じたが、他の内容は理解するのが難しく、板書やプロジェクターも見づらかったので、全体を通じての講義内容がほとんどわかりませんでした。
7	自分が将来どんな人間になっているかは分からない。しかし、これまで受けてきた授業の内容がどこかしらで役に立つときが来ると思っている。リカレントの方々の話を聞いたことは、よかったと思う。まだ、リカレントの方々の年齢になるには40年も先の話になるが、その時に先人の知恵が役立つはずだと思った。
8	リカレントの方々と発想の違いや、考え方が違って、面白いなと思いました。
9	この授業では、現役学生の人々だけでなく、自分たちより人生を多く経験している方々と共に授業を受け、その人たちと話し合いとかでは自分たちと全く違う価値観を持っていて、勉強になりました。本当に経験というのは大事だと思ったし、自分ももっと多くの経験をしたいと思いました。
10	リカレントの皆さんの話が聞いて、自分にはない考え方が聞いてとてもよかったです。
11	今までありがとうございました。高齢者についてたくさん学びました。

表7 つづき

12	リカレントの人とグループワークをしたり、私が今まで知らなかったことを教えてください、今まで気づかなかったこともわかりよかったです。
13	リカレントの人たちと一緒に学んで、人生の先輩なので、とても貴重な意見を聞くことができよかったです。
14	この授業の感想としては、リカレントの人とのグループワークがとても印象的でした。自分たちの意見ともちろんかぶることはあったのですが、さらにそれを肉付けしたような意見や、世代が違うからこそその意見など様々でした。普段、世代が違う人と意見を交わすというのは、親や兄弟くらいで、とても刺激的でした。
15	リカレントの方とは話し合う機会は少ないので、めずらしい体験ができてよかったです。
16	高齢者のことをいろいろ教えてもらいました。確かに、経験しないとわからないことはあるが、けっこう勉強になりました。
17	毎回の講義で、今の社会や高齢者に対しての問題によく考えさせられたと感じました。また、あらゆる物事に見方を変えて、自分としてスキルを上げられるようなものを思いました。今の世の中に必要な講義で、楽しかったです。
18	普段は余り関わることがない、リカレントの方々とは授業ができて、自分とは違う考え方や視点に気づかされることが多く、面白かった。実際にお話しすることはなかったが、また、別の機会があれば話してみたいと思った。
19	リカレントの人たちと授業を一緒に受けて、先生が質問した時の答えが、参考になったり、真剣に受けられたのでよかったですと思います。
20	リカレントの人たちと学び、私たちが考えていることとは違い、楽しく学ぶことができました。やはりリカレントの人たちの意見を聞くと、これからの自分の人生に影響をもたらしてくれると思いました。
21	人生の先輩がいたので、他の授業と全く違った。やはり、そういう人の意見は参考になるし、きちんとした考えを持っていて、大学生もまだまだ子どもだと思いました。
22	この授業では、他の授業ではあまりない、リカレントの人たちと一緒に学ぶことができたので、とても豊かになったと思う。年代での違いや、それぞれの考え方も知ることができたのでとてもタメになった。
23	講義が短かったので、もっと知りたいと思いました。とても面白く興味深かったです。

トではアニメーションに描かれた風景・情景から読み取れる名詞群が並べられているだけであったのが、「思い出」「家族」「老人」というような、エリクソンの提出したジェネレイショナル・サイクルや高齢期の心理社会的危機「統合vs.絶望」という課題に関連したことばが新たに提出されたことが判明した。

これらの結果から、リカレント生と現役の学生との間には、高齢期を描いた同じ象徴を見て感じることに、高齢期を生きている者とそうでない者との間における差異が存在することが明らかになったといえる。さらに、異なる世代の見解を聞くことによって、正規学生の認識の一部に変化が生じたことも今回の結果は示している。

表7は、講義最終日に受講生から無記名で正規学生から提出された今回の講義に関する感想である。その中には高齢期を生きているリカレント生と講義において共学し、彼らとの意見の交換や彼らの意見に傾聴することを通じて、「高齢期」という若い学生にとっては自分との関わりにおいて考えることができないものであった世界が、自分との関連性で捉えられるようになったとの記述がある。高齢期を生きるリカレント生の意見が、後続世代の正規学生の生き方に影響を与えている。ここに高等教育機関が提供したりカレント教育の機会を通じて先行世代と後続世代が共学し、相互に影響を与え合うことを通じ、学習集団の中にジェネレイショナル・サイクル形成の萌芽が認められたといえるのではないだろうか。

#### 4. 結び

「福祉国家は議会が立法化し政府が実施するものであるが、人々が福祉に関係する諸々の事柄について感じ考える福祉社会が形成されていなければ、法律や制度は機能しない」<sup>(22)</sup>と社会福祉の視点から阿部志郎は指摘する。日本の社会は伝統的に家族共同体が扶養共同体として機能してきた。未だかつて世界のどの国も経験したことがない超高齢社会が到来するとされる21世紀の日本社会を考えると、公的社会保障制度の維持・整備はいうまでもないが、家族が、そして学習を通して出会ったもの同士が学びの成果を共有

し、相互に支え合う人間のネットワークを形成することが高齢社会の構築を考える上での重要なカギといえる。

大学のリカレント教育事業や公開講座等に参加する高齢者の数は、全国的に見れば未だ少数派である。しかし、今回のささやかな試みは高齢期という今を生きる高齢の受講生と若い正規学生が、高等教育機関の学びを通じて、出会い、問題を共有し、意見を交換することを通じて、高齢期を生きる先行世代（リカレント生）が後続世代（正規学生）の思考回路に新たな刺激を与え、彼らの先入観を変化させていく可能性がある事を示すことができた。今後、このような取り組みが社会の中に広がりを見せ、異なる世代が学びの共同体において結ばれることを通じて、異世代間において「育て—育てられる連鎖（ジェネレイショナル・サイクル）」が生まれ、超高齢社会を支える新たな価値を生み出す契機となることを期待したい。また、今後も異なる世代が共学することを通じ、そこに生み出されるものについての考察を更に深めていきたいと考える次第である。

#### 注

- (1) 増田寛也+人口減少問題研究会「2040年 地方消滅。『極点社会』が到来する。」『中央公論』中央公論新社、2013年12月号、18-39頁
- (2) 対談 片山善博×小田切徳美「真の『地方再生』とは何か」『世界』、2015年5月号、81-82頁
- (3) 内閣府『平成26年版高齢社会白書』2-4頁
- (4) 教育再生実行会議（第六次提言）「『学び続ける』社会、全員参加型社会、地方創生を実現する教育の在り方について」2015年3月
- (5) 利谷信義、大藤修、清水浩昭編『老いの比較家族史』三省堂、1990、12頁
- (6) 長谷川和夫・那須宗一編『HANDBOOK 老年学』岩崎学術出版、1975、357-358頁
- (7) Erikson, E. H. On the generational cycle. *International Journal of Psychoanalysis*, 61. 1980. p. 213
- (8) 鈴木忠、西平直『生涯発達とライフサイクル』東京大学出版会、2014、152頁
- (9) 佐久間章「正規学生との共学による大学公開講座の取組について」札幌国際大学紀要（40）、2009、131-140頁
- (10) 大橋眞・中恵真理子・光永雅子・斉藤隆仁「地域社会人、学生、教員でつくる

学びのコミュニティから創出される新たな視点』『日本生涯教育学会論集』32, 2011, 3-11頁

- (11) 室俊司・大橋謙策編『高齢化社会と教育』中央法規出版, 1985, 89-92頁を参考
- (12) 社会教育審議会答申「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」1971年
- (13) 国連, 高齢者問題世界会議勧告「高齢者問題国際行動計画」1982年
- (14) 文部科学省「平成24年度開かれた大学づくりに関する調査研究」より
- (15) 「今後5カ年の高齢者保健福祉施策の方向～ゴールドプラン21～」2000年より
- (16) 稲生頸吾編著『高齢者教育テキストブック』東京教科書出版, 1992, 42頁
- (17) (13) 前掲書42頁
- (18) 高齢社会対策の推進の基本的在り方に関する有識者会議報告『高齢社会対策の推進の基本的在り方について一年齢から自由な社会をめざして一』(Ⅱ, 基本的認識 (3) これからの高齢者), 平成13年
- (19) (7) 前掲書145頁
- (20) (7) 前掲書152頁
- (21) 「つみきのいえ」2008年に発表された加藤久仁生監督による日本の短編アニメーション映画, 発売元ロボット
- (22) 阿部志郎『教会と社会福祉』日本基督教団出版局, 1979, 70-71頁